

個人の時代、

仏教の現場から

TOP  
Interview

今城良瑞さん

真言宗僧侶・41歳

超宗派メッター☆実践福祉会理事長

特定非営利活動法人HAPPY FORCE理事長

# サリュ Spiritual

VOL 6 2012 Winter

## 「真言宗の 教えでは、

法を説くこと、救済は別個であっていいんです。」このたび、2011年9月に設立した「超宗派メッター☆実践福祉会」を一般社団法人化した。メッターとはパーリ語で「慈悲」。今城さんは会の代表者として、「慈悲の精神のにつと、菩薩行を実践し、広く社会に貢献する」超宗派の僧侶の結び役となっている。

会の設立のきっかけは、ネット上で特に若者たちに対する相談に乗り続けたことだった。2005年に設立の「HAPPY FORCE」では不登校や引きこもり、その後、会員制のサービスmixiでの「言えない心の傷」では、虐待、DV、トラウマ体験に向き合った。やがて「ネットからリアルへ」と、場や機会、さらに扱うテーマも広がった。2008年には法務省の保護司にも就いた。

「こんなにボロボロになってからではなく、もっと早いところから関わりたい。」一人でやるよりは、と仲間に声を掛けた今城さん。「『貧を濟うには財をもってし、愚を導くには法をもってす。』これは、お大師さんが恵果和尚に宛てた碑文の一節です。今、無住寺院が増えています。そうした場をDVシェルター、里親制度の延長によるファミリーホームに生かしたいんです。助かる場と、助かる人が増えれば、

## それでいい。」

多彩な活動が「仏教×社会貢献」という観点で今城さんご自身でウェブサイトにとまっています

各種の相談用にmixiを使っておられます  
参加者が2万人を超えた「言えない心の傷」は  
「[http://mixi.jp/view\\_community.pl?id=1199574](http://mixi.jp/view_community.pl?id=1199574)

<http://mikkyou.com>

應典院<お寺MEETING Vol.1>「ネット世代は、寺院を変えるか」での今城さんの語りが録画でご覧いただけます。 <http://www.ustream.tv/recorded/7674992>



# 祈りの 公共性を 考える

生と死の分断から、生死の連続へ。



写真:内山節さん  
2012年9月15日「寺子屋トーク」

3.11以後、非合理的の復権が著しく、「祈り」という身体技法が注目されています。

当然ながら、あらゆる宗教の根底には「祈り」があります。それによって、現世を超えたつながりや、死者との交流など宗教独自の関係論や物語を呼び込んでもきました。宗教の公共性を考える時、これまで近代的価値から取りこぼされてきた「祈りの力」に着目し、これからの社会にどう活かしていけるのか、議論すべき時を迎えています。

また、「祈り」は何も宗教的体系に基づくものだけとは限りません。先般の日本宗教学会でも「祈りの公益性」について議論があったと聞きますが、宗教的制約から自由であり、同時に宗教的体系に対し謙虚な「開かれた祈り」が求められているのかもしれない。被災地などで繰り返される「祈りの市民集会」のように。

宗教サイドからも市民サイドからも開かれた、普遍的な「祈り」について考えます。

3・11の震災以降、「祈り」の持つ意味が問い直されてくる。宗教儀礼における祈りと、公共世界における普遍的な祈り。両者は互いを相いれない、対立した祈りなのだろうか。近代が切り捨てた「祈り」を、これからどう拾い上げていけばいいのか。3・11以後社会の形成に、「祈り」はどのような意味を持つのか、考えたい。

# 祈りとコミュニティ

Spiritual  
Opinion

ケアする人へのケアは  
いかにして可能か



森口 弘美  
Hiromi MORIGUCHI

1971年生まれ。大学卒業後、通所授産施設たんぼぼの家の職員として働いた後、財団法人たんぼぼの家の「ケアする人のケア・プロジェクト」に従事。2012年度より同志社大学社会学部社会学部福祉学科助教、同プロジェクトのアドバイザーを務める。

## 祈りとケアを通じた他者からの学び

去る2012年9月15日、應典院にて「<祈り>から3.11後社会をデザインする」と題された寺子屋トークに参加した。その日メインの講演者であった内山節さんは、「家族の幸せを祈る気持ちがあるから家族が成立する」(『内山節のローカリズム言論—新しい共同体をデザインする』(社団法人農山漁村文化協会発行))という。そうであるなら、もしかしたら、私がこれまでイメージしてきた「ケア」は、もしかしたら、「すなわち『祈り』」と考えてもいいのかもしれない。

「介護」という言葉が、誰かを身体的に手助けする行為をさすのに対して、たんぼぼの家では「ケア」を気づかいや心配や配慮を含めた概念として捉えてきた。大切な家族を自分で介護することができず、やむなく入所施設に入れて自責の念を抱えている人、あるいは遠くに居る家族が病気になって心配だけれど電話ぐらいいいかできないという人、そんな人たちが私たちの捉える「ケアする人」である。

内山さんの「家族の幸せを祈る気持ちがあるから家族が成立する」という言葉の意味は、血のつながりがあって一緒に暮らしていても「祈り」がなければ家族とは言えず、逆にも、離れていても血のつながりがなくても「祈り」があれば家族だということではないだろうか。同様に私たちも、何の思いも介在させずただ流れ作業のように介護という作業をする人のことではなく、たとえ介護という行為を実際に行っていないとしても、何らかの思い—この思いには、思いやりだけではなく、後悔や葛藤などのネガティブな面も含まれるが—を抱いている人のことを「ケアする人」とよんできた。

本稿は、財団法人たんぼぼの家の「ケアする人のケア」の取り組みから見えてきた「ケアの相互性」、「ケアを介した学び」、「ケアの文化」という3つの観点を紹介しながら、それらを私がイメージする「祈り」の光景と重ね合わせてみる試みである。

### 他者の気づかいを引き出す力

ケアは一方的な行為ではなく、常に相互的な営みである—これは、「ケアする人のケア」というタイトルをつけたセミ

ナーや報告書で頻繁に使ってきたフレーズである。介護を担う家族、あるいは介護や看護の仕事をする人からは時折、「ケアをしてもらっているのは自分のほうだ」という言葉がきかれる。介護をする相手からの「ありがとう」「あなたも気を付けて」といった感謝や心配りを感じるとき、「これでよかったのだ」と勇気づけられ、「またがんばろう」と元気になるというのである。ケアする人は、ケアする相手からこうした気づかいや配慮を受けとることがあるという意味で、ケアは相互的なものであるといえる。

では、このケアの相互性を「祈り」に置き換えるとどのようになるだろうか、果たして祈る人がその相手から「祈られる」ということはあるのだろうか。そのことを考えるためには、ケアの相互性をもう少し深くみていく必要がある。

十数年前、私は10歳年上の同僚女性と一緒に暮らしていた。一緒に暮らすといっても、前年に乳がんを患ったその同僚が病気を機にマンションを購入し、その頃遠方から通勤していた私が時々寝泊まりするのに一室を間借りしていたという状況であった。間借りを始めて半年ほどした頃、彼女のがんは再発し、入院、手術、退院、そして転移と慌ただしい経過をたどっていくこととなった。

同僚のがんが再発したことで私は「自分はこの事態にどう向き合うべきか」をととても悩むことになった。「何かしてあげたほうがいいのではないかな。いや、再発したといっても、彼女は今までと変わらず普通に暮らしているし、今までと接し方を変えるほうがおかしいんじゃないか……。」それでもやはり、重い現実を前に、それまでとなら変わりなく仕事や勉強にと忙しくしている自分自身に「本当に何もしなくていいのだろうか」と自問する日々であった。

そんな日々のなかで、あるときふと、必要なことは彼女が私から引き出してくれるのではないかと考えた。ケアとは私が「する」ものではなく、相手から「引き出される」ものだと思えたとき、私は彼女のもつ力、すなわち自分へのケアを周りの人から引き出す彼女自身の生きる力を信じようと思えるようになった。私自身はそのタイミングを待ち、その時のために自分なりに準備をしておくだけでいいと思えるようになり、肩の力を抜



喪失への悲嘆を「分かち合う」のではなく「向き合う」…

お寺という場で、グリーンコミュニティが立ち上がる。

(写真：應典院研修室B・2012年5月26日)

いて同居生活を続けることができるようになった。

## お互いの存在を支え合う

「ケアする」という言葉から私たちは、ケアする側の主体的な行為や働きかけをイメージしがちであるが、実のところはそれに先立って、そのケアを引き出している誰か、あるいは何かが存在すると考えて良いだろう。これがケアの相互性である。このことは、祈りについても言えることではないだろうか。

「家族にも祈りがある」というとき、家族はお互いに気にかけてあっているという意味で、家族の一人ひとりとは、祈る側であるとともに祈られる側でもある。しかし祈りの相互性はそれだけではない。「あの人が長生きできるように」「この子が病気になるないように」と祈る、その祈りを引き出したのは、「あの人」であり「この子」であるといえる。祈りを引き出すのは生きている人だけではない。亡くなった大切な人を思う祈りは、他でもないその大切な人が、その祈りを引き出していることを意味している。私たちは祈ることをとおして、姿は見えなくなったけれど大切なその人の存在の確かさを、実感したり共有したりできるのである。

私の同僚は、私と同居を始めて1年もたたないうちに亡くなってしまったが、それから10年を経た今でも、私は彼女にずいぶん支えられていると思っている。病を得たという人生のその大事な局面で、彼女は私と暮らしてもいいと思ってくれた。私と暮らしたいと思ったかどうかはわからないが、少なくとも私でもいいと思ってくれた。この「選りばとってもらえた」という経験に、私は自分の存在を支えられてきたし、そのことは今の私にも少なからず影響を与えつつけている。

祈りを引き出す主体として誰かの存在を感じる事ができたとき、自分もまたその人によって選り取られ、支えられているのだと思える。そうだとすればケアも祈りも、生き死にを超えて、お互いの存在を支え合うという意味で相互的な営みであるといえるのではないだろうか。

## アートを介した私の成長

次に、ケアを介した学びについて考えていきたい。ケアの仕事をする人からは、「ケアをとおして自分が成長した」という言葉がよくきかれる。たとえば訪問介護で他人の家に入り生活をサポートすることは、その人の生活の仕方や生き方に触れることでもある。生きてきた時代も違えば、経験してきたことも全く異なる相手の生活や人生に触れたとき、「このようなやり方もあったのか」「そんな生き方も素敵だな」と、自分の生活や生き方に反映させていくことができるという。

では、祈ることによって、祈る人が学び成長するということはあるのだろうか。あるとしたらそれはどのようなことだろうか。ここでもまた私の経験を引き合いに出して考えてみようと思う。こんどはケアではなく、アートの体験である。

たんぼぼの家は、障害のある人のアート活動の支援に精力的に取り組んできた。私自身はそのような組織にありながら、アートに関してはまったく自信がない職員の一人であった。美しい音楽をきいてリラックスしたり、鮮やかな色彩の絵に見とれたりすることはもちろんある。けれども、前衛的と形容されるようなものや現代アートといわれるようなジャンルになると正直よくわからない。何を表現しようとしたのか想像しようにも「無題」とタイトルがついていればその手掛かりは断たれ、「いやいや頭で理解するのではなく、感じるのがきっとアートなんだ」と思い直してみても、作品の前で何をどう感じているのかさえよくわからなくなる。

そんな私に、アートの原体験ともいえる出来事があった。2002年12月、「ひと・アート・まち」(主催／近畿労働金庫、企画／財団法人たんぼぼの家)という催しが大阪港区の海岸通ギャラリーCASOで開かれた。アートでまちを人間的で豊かな空間にしようという一連の企画の、その年のテーマは「語りえぬもの」。私にとってこのテーマは「見る前からすでにお手上げ」という感があった。それでもともかく、自分が所属する組織

の催しであるという理由だけで、つまり積極的な関心があったわけではないけれど半ば義務感で、時間を見つけて会場に足を運んでみた。

会場では、障害のある数人の作品、すなわち好きなもの、好きなこと、作りつづけたもの、やり続けた結果できたものなどが展示されていた。今でも私の印象に残っているのは、箱いっぱいにあふれるほど集められた葉のカラ、そのカラの持ち主が毎日決まった時間に必ずするラジオ体操の様子を撮った映像、あるいは彩色された無数の二重丸で埋め尽くされた「いくらのパジャマ」の絵や、その絵をもとに制作されたと思われるパジャマの現物、さらにはそれを着て布団に寝転がっている作者の写真などである。

福祉や教育等の分野で障害のある人に接した経験のある人なら、そうした作品がどこから生まれてきたものかだいたい想像がつくのではないかと思う。それは、障害のある人の、とりわけ自閉的傾向と言われる人たちの「こだわり」と言われる特性である。私はそれまで、福祉ではなくアートを学んできたスタッフが、そうした「こだわり」を「ユニークでおもしろいもの」として評するのを見てきた。「語りえぬもの」というテーマのこの展示は、作者の「こだわり」を「ユニークでおもしろいもの」として見せようとしているというのが、見終えた後の私の“理解”であった。

不思議な体験をしたのは、その会場をあとに駅に向かって歩いていときだった。夕暮れ時の道路を海風に吹かれながら歩いていた私は、突然なんともいえない解放感に包まれた。それは今までに感じたことのない気持ちよさで、言葉で表現しようのない感覚であった。あえて言葉にすれば、「私はどうあってもいいのだ」という、“感覚”というよりも“確信”に包まれながら歩き続けた。この解放感が、あの展示を見たせいだと思い至ったのは、駅に着いて電車に乗り、車窓から見える景色が夜景に変わった頃であった。私はまさに「語りえぬもの」で満たされていた。

私たちは日々、仕事や家事にとさまざまな「しなければならないこと」に膨大なエネルギーを注ぎながら生活している。それは、私たちの多くがそれらに価値や意味があると考えているからである。一方、「語りえぬもの」の作者たちは、そうした価値や意味の外側で生きている。「しなければならないこと」や「一般社会ではするべきとされていること」から離れて、好きで好きで仕方がないことや、やめられないもの・やめたくないものに没頭する時間を生きている。私とその日会場で見たのは、この外側の世界をあるがままに肯定し見せるという試みであったと言える。私は、その空間に身をおいたことで、「しなければならないこと」から解放され、「どうあってもいいのだ」という確信に至ったと今では思っている。

実のところ、それ以前においても、私は頭では外側の世界を認めているつもりであった。障害のある人が「しなければならないこと」ができなかったとしても、「それで人間の価値が下がるわけではないし、それでもいいじゃない」と思っていた。そのつもりでいた。しかし本当のところは、障害のある人に対しては

それで良くて、自分に対してはそんなことを許してはいなかったのである。私に課された「しなければならないこと」が万が一できなくても、私自身の人間としての価値が下がるわけではないとは、心の奥底では思っていなかったのだと思う。

障害のある人が生きている世界は私の“理解”を超えた豊かさがある——そう確信できたことで、私は自分が以前よりも自由になったと感じられた。実際には日々の生活は「しなければならないこと」に追われていたとしても、「別の生き方も自分にはできるはずだ」と思えるようになった。

## 揺らぎともがきの中で もたらされたもの

ケアを介した学びとは、この私のアートの原体験に近いのではないだろうか。つまり、単に他人の生活や生き方に触れて、その良いところを取り入れるということにとどまらない。相手の生きてきた価値観に触れることで、自分自身の価値観が揺さぶられ、生き方の幅が広がるのである。実際の生活スタイルが変わる場合もあれば、心の持ち方に幅ができる場合もある。生き方の幅が広がることは、自分で選ぶことができることを意味し、それは幸福感につながる。ケアする人たちは、このことをもって、「ケアすることで自分が学び成長した」と言っていると考えられる。

ずいぶん回り道をしたが、ここでようやく「祈り」に立ち戻ろう。たとえば、死者を弔う場面において、祈る人は祈ることをとおして、生者の世界の外側に思いを馳せていると言えるのではないか。あるいは、理不尽としかいえない悲惨を前に、祈る人は理屈では理解不能な目の前の事態をもまろごと包み込んで意味を与えてくれるような大いなる摂理を知りたいと一心に念じるのではないだろうか。もしそうだとしたら、障害のある人の生きる世界に触れて解放感を味わった私のように、異世界に思いを馳せたり、大いなるものに心を致したりすることは、祈る人に何らかの変化をもたらすことがあると考えていいだろう。

ケアにおいては、このとき鍵になるのが相手の側に身をおくということである。深い学びを経験したと語るケアする人は、自分の価値観では到底受け入れがたいような生活を続けている人に出会ったとき、その人の生活を改善しようと自分の考えを押し付けるのではなく、また逆に「自分には理解できない」と距離を置いて見過ごすのでもなく、まずはその人のやり方や考え方を知らうと心を砕き、そこに至った経緯や背景を理解しようと努力する。それは時には、相手の人生を自分もまた追体験するような事態になり、ケアする人は大きな揺らぎを経験する。祈ることもまた同じではないだろうか。受け入れがたい悲しみ、あってはならないと思えるような悲惨を前にして、「この事態は自分の宗派の教義としてこのように意味づけられる」と自分の側の理屈で解釈してしまうのではなく、また「祈るだけでは実際には何も変わらない」と諦観するのでもなく、その理不尽さの中に自らを置き、それに救いをもたらす大いなるものを

南太平洋の西サモアの島にて小枝を拵りて砂浜につきますと貿易風につつまるるで自然を讃歌するよまにそとがフラッグ

(福井恵子さん提供・1993年)



なんとか探し当てようともがきつづけることによってこそ、祈る人にもまた、「学び」や「成長」と言えるような、あるいはそれに代わるような何かもたらされるのではないだろうか。

祈りを大切にできる  
コミュニティに向けて

最後に、ケアの文化について触れておきたい。「ケアする人のケア」の取り組みは、ケアの文化の構築をめざしてきた。ケアの文化とは、みんながケアの大切さを共有し、実践すること、つまり、身近な人を気にかけて、声をかけ、心配し合うことを大切に実践できる社会を意味している。

福井恵子さんは、10年以上お義母さんの介護をしながらフラッグの作品づくりやワークショップなどに取り組んでいるフラッグデザイナーである。つい先日、「ケアする人のケア」の事業の一環として運営しているインターネット放送局「ケアラーズジャパン」(<http://care-jp.tv>)のインタビュー番組で、福井さんにお話を聞く機会を得た。福井さんにインタビューをお願いしたのは、介護家族であるということよりも、福井さんがフラッグのことを語るその言葉が、まるでケアを語っているよう

に感じられたからである。

福井さんの家では、祝日には国旗ではなく、鯛が踊っている絵のフラッグを掲げておられる。子ども達はそのフラッグを見てわっと盛り上がっている声が聞こえてくる。「それがまちの音かな」と彼女は言う。また、掲げた旗を見て「おもしろいですね」声をかけてくれる人がいる。「会話がはずむ街になれば」と彼女は言う。このような話をきくと、福井さんご自身がまさにケアの文化の発信地であると私には思えてくる。

福井さんによると、自身のデザインによって布を染め上げるのは表現全体の50パーセントである。あとは自然の風と太陽の光が表現してくれる。地球の呼吸に合わせて動く旗こそが彼女の作品である。「託す」——インタビューで何度か聞いたこの言葉は、福井さんの紡ぎ出す言葉のなかでも、私がとりわけ大好きな言葉である。

「ケア」も「祈り」も自分だけでは完成しない。託せる誰かの存在をまずは信じてみることで、そして私がケアする姿、私が祈る姿を見た誰かがそれに心を動かされること、その誰かがまた次の人に何が大切かを伝えていってくれるんじゃないかと希望をもつこと……。そんなことを繰り返しながら、私も3.11後社会の一員として「新しい時代」を作っていこうと思う。



●財団法人たんぼの家 (<http://popo.or.jp>)  
障害のある人の芸術文化活動の支援を中心に、人々の創造的な関係性を創出し、多様な価値観を包摂する文化づくり・社会づくりをめざして活動する市民団体。1999年から取り組む「ケアする人のケア・プロジェクト」では、セミナー等による啓発活動のほか、情報誌やインターネット放送による情報発信などを行っている。

フリーライター 田中市三の

仏書探訪

現代人の祈り  
—呪いと祝い—

「われわれは今深々の『呪いの時代』に踏み込んでいっている。ネット内での匿名で発言」「ハンドルネームを使って語る顔のないやり取り。民主主義を盾に『正義の実現』や『公平の実現』を『攻撃的な文脈』によってのみ語る政治家など、呪いの発信元はいろいろな様相を呈す。呪い、このマインナー思考に陥ち込んだ人々が気づかぬばならぬ想念は『予祝』『祝い』『祈り』だ。仏教では『布施』『自分の持っているものをシェア』して『利他の精神を發揮し』『愛語(よく調えられた言葉)』で『他者の畏れを取り除く』。それが『予祝』『真の『祈り』』。精神科医名越と釈の対談では『魂の痛み』について語り、鼎談では現代人の顔と対峙しつつ宗教の巨人、法然・親鸞・道元・日蓮らの肖像画に宿る強烈な『心的エネルギー』を探る。

釈 徹宗・内田 樹・名越 康文 著  
●サンガ新書(850円+税)



ラリー・ドッシー 著 / 大塚 晃志郎 訳  
●日本教文社(1,524円+税)

祈る心は、治る力

九〇年代以降、オルタナティブ・メディスン(代替医療)への関心が高まった。「癒す心 治る力」のアンドル・ワイルは同書で「祈りと治癒との関係について調べている数少ない研究者のひとり」として、ドッシーの業績を認めている。「祈りが効く証拠」「祈りにまつわる議論」「祈りとは何なのか」「祈りはどうあるべきか」。祈りの形態と本質を多年収集分析した科学的調査(データ)に基づいて報告された本書は、業学の熱烈な信仰者に対して次のように断言する。祈りの「最も大切な特質のひとつは『愛』—共感、慈しみ、深い思いやり—であり、愛とは、解き放つこと、思い切つて自分の外に出ていくこと、自分と他者をへだてる境界を打ち壊すこと」だ。科学は祈りをそう捉えている。「科学とは決めつけを保留し、偏見をしりぞける方法である」

「かなしみ」の哲学  
—日本精神史の源をさぐる—

上代(近世)物のあはれという日本古来の流れと近(現代)近代知による合理・批判・自我の流れの対比のなかに「かなしみ」の様々な形相を捉え、そこに「日本精神史の源」を探る。上代(近世)の『かなしみ』は倫理や美や超越性にひらかれる契機であり、「永遠の根源」へと感情を浄化し、無限のあるものと出遭う祈りでもあった。しかし近代知が支配する個人・知性・合理・批判の漆に塗り込められた「かなしみ」は、そこに補助線も引けず、「存在の喪失、欠落、損傷、疎外、彷徨」という有限性と愛憎のみに執著し、悲劇のセンチメンタリズムを深めていく。そこに補助線を引いた漱石は「則天去私」に至り、ニヒリスト白鳥は「あきらめ」の中で突如、折った。有限(肉性)と無限(霊性)のはさまにうごめく人間の美存に迫る好著。

竹内 整一 著  
●NHKブックス(970円+税)



内山 節 著  
●農山漁村文化協会(1,800円+税)

内山節のローカリズム原論  
—新しい共同体をデザインする—

一気に読んだ。記憶に残った言葉をつなごう。3・11復興のなかに「日本人の確信とは何か」を見出そうとしている。現代日本のシステム社会は崩壊寸前だ。しかし日本にはまだ「人間のパートナー」としての自然がある。「土着的な精霊信仰」も生きていっている。そこには「生者と死者の交わる世界」もある。「自然(じねん)のおのずからの理由」に従う関係も健在だ。柳宗悦の「民藝運動」も息づいている。「人間存在の哀しさ」を感じることで「他者への許し」もできる。「多層な共同体で生きる」「智慧・祈り・願い・信仰」は論理を超えて実在している。三澤勝衛の微細な風土観の元「世界をみつめ直すとき」21世紀日本のグランドデザイン、ローカリズムの創出により個を脱した自然生命(霊性)われの実現も可能となる。

# 葬式仏教で、地域はつながるのか

## 吊いの共同体を再考する

取材・文 杉本恭子

2010年に始まった「お寺MEETING」は、1回目は「ネット世代の僧侶」、2回目は「宗教者のホームレス支援」と宗教者のムーブメントにフォーカスしてきた。3回目のテーマは「葬式仏教で地域はつながるのか」。葬送儀礼を研究するルポライターの高橋繁行さん、仏教学者で浄土宗僧侶の安達俊英さんをゲストに迎え、日本各地に残る“野辺送り”のあり方から葬儀と共同体の関わりを再考する議論が行われた。



写真：ダンボールで再現した座棺（高橋さんが当日ご持参）

### 3.11以降鳴りを潜めた“葬式仏教バッシング”

今回の『お寺MEETING』は、『應典院コモンズフェスタ』の1プログラムとして開催されたものだ。まず、モデレーターを務めた應典院代表・秋田光彦さんから今回のテーマを選んだ問題意識の共有が行われた。

秋田さんは、東日本大震災の被災地支援に行った僧侶たちが「東北の分厚い寺檀関係に担保された豊饒な儀礼社会」に出会い、また「葬送における僧侶の役割を再発見して自信を回復した」ことに触れ、「現在の葬式仏教の見失っているものを明らかにしたい」と投げかけた。

2010年に『葬式は、要らない(島田 裕巳著、幻冬舎新書)』が発刊されて以来、メディアはこぞって“葬式仏教”をバッシングした。しかし震災発生後は、この“葬式仏教バッシング”が鳴りを潜めていると秋田さんは見ている。これもまた、東北の儀礼社会のなかで失われた命を弔う姿が伝えられたことを通して、「葬式仏教の核にある大きなものに触れた」からではないかと言うのだ。

都会では、かつての日本の葬送儀礼に見られた「湯灌」も土葬も行われなくなって久しい。僧侶たちもまた、葬儀会館で行われるパッケージ化された葬儀に慣れきっているのではないかと。かつての日本の葬送儀礼を改

めて知るために、高橋さんが制作したDVD紙芝居『日本のお葬式～あなたの村の野辺送り』を会場で視聴した。

### 「火葬されたくない」死は“故郷の山へ帰ること”

高橋さんは、近畿を中心に土葬と野辺送りの調査研究を行っている。野辺送りとは、野辺(火葬場や埋葬場所)まで親族や関係者が葬列を組んで死者を見送る風習のこと。調査の目的は「私たちは遺体とどう向き合うべきなのか」「自分は自らの死をイメージできるのか」のふたつだったという。現在の日本はほぼ100%火葬が行われる世界一の“火葬国”。しかし、比較的近年まで土葬だけでなく風葬も行われていたようだ。

『日本のお葬式～あなたの村の野辺送り』は、高橋さんが各地を調査して集めた野辺送りを自ら絵に描き起こした紙芝居を元に製作されたDVD。葬送の儀礼から四十九日までの行事を詳細に紹介したものだ。

同DVDによると、遺族はまず湯灌で遺体を清めて膝を折り曲げ、座棺に納棺することで死者と向き合う。そして、村人たちは死者が出たことを知ると、男性たちは野辺送りのための葬具を、女性たちは葬式餅を作りはじめる。炊事の世話をする人、土葬なら墓を掘る人、火葬なら遺体を焼く“野焼き”をする人……村中が死者を送る儀式で何らかの役割を持って参加する。葬送行列では、生まれ育った村を見おさめるようにと座棺のなかの遺体は後ろ向きに座らせる。そして、葬儀の後は、四十九日まで村中の人が集まって毎晩ご詠歌を唱える風習もあるのだそうだ。高橋さんはそういった事例に触れるたびに「吊いの共同体が生きているのはこういうことだ」と強く感じるという。

ひとりの死者に対して、共同体全体がその死を送る儀礼に参加する。都市に生まれ育ち、葬儀といえば「葬儀会館で焼香をして、お香典を置いてくる」ことだと思っている世代には想像もつかない死への関わり方だと思う。

高橋さんの調査によると、驚くことにほんの10年ほど前までは滋賀県でも土葬と“野辺送り”が行われていたという。また、河瀬直美監督の映画『殯の森』の舞台となった奈良・田原地区や十津川村では、今なお土葬が行

都市生活で利便性が追求された結果、地域社会で継承してきた文化は葬儀社への「お任せパッケージ化」していきました。



應典院 秋田光彦 住職

浄土宗・大蓮寺住職・應典院代表。1955年大阪府生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。情報誌『びあ』、映画プロデューサーを経て30代で加行。浄土宗教師として『教化情報センター21の会』事務局長として、数々の宗教イベント・メディアのプロデュースを手がける。97年、大蓮寺塔頭・應典院を、NPOを若いアーティストの拠点として再建。著書に『葬式をしない寺―大阪・應典院の挑戦(新潮新書)』。近著に釈徹宗氏との共著で『仏教シネマ～お坊さんが読み説く映画の中の生老病死(サンガ)』。



土葬を続けてきた地域の方にとっては、自分が生まれ育った故郷に帰れるというリアルな安心感が土葬にある、といえます。

ルポライター 高橋 繁行さん

1954年京都府生まれ。「高橋葬祭研究所」を主宰し、『お墓は、要らない』(学研新書)、『寺、墓、葬儀の費用はなぜ高い?』(飛鳥新社)、『葬祭の日本史』(講談社現代新書)、『死出の門松: <こんな葬式がしたかった>』(講談社文庫)、『看取りのとき: かけがえのない人の死に向き合う』(アスキー新書)など、死と吊い関連の著書を手がける。また、ルポライターとしては科学、人物、笑いについても取材・執筆を重ね、『日本の歴代ノーベル賞』(アスキー新書)、『吉本興業の戦略』(竹書房)など、著作多数。

葬儀という葬送の儀礼は、遺族や参列者の方々と共に場を創り出すと、後で「いいお葬式だった」という実感が残ります。



知恩院浄土宗学研究所嘱託研究員 安達 俊英さん

1957年大阪市生まれ。大阪大学文学部卒業。1988年、大阪大学文学研究科博士後期課程満期退学。その後、東方学院、知恩院浄土宗学研究所の研究員を務める。知恩院浄土宗学研究所研究員となったのをきっかけに、法然浄土教研究に着手。1996年には佛教大学文学部仏教学科専任講師、2001年に佛教大学文学部仏教学科助教授に。「浄土三部経」と『往生論』といった論文執筆や国際学会での英語発表などを通じて、浄土教の総合的研究に取り組んでいる。

われている。高橋さんは言う。「土葬を続けている地域の人は『火葬なんかされたくないで』と言うんです。彼らには、土葬によって自分が生まれ育った故郷の山に帰れるというリアルな安心感があります」。

1990年代初頭からは、「自然へ帰りたい」という観念的なイメージから海や山に散骨する自然葬を求める声も広がっているが、高橋さんは「都市に暮らしている人たちには帰るべき“故郷”となる海や山があるのか？」と疑問を持ち、昔ながらの土葬による「故郷の山へ帰る」感覚との違いを根本的に考え直す必要があると発言されていた。

## 死者を送ることから地域共同体が結び合う

高橋さんは、沖縄地方では遺体をムシロにくるんで山に置いておき、毎日死者の顔を見に行く風習があったことも紹介されていた。「死者が若い人である場合は、遊び仲間がお酒や楽器を持って行って、遺体の周りで思う存分踊り狂ってなぐさめた」と言う。そこには、生死を分けてもお結び合おうとする関係性の熱がたしかに存在する。また、現在ではグリーフケアに携わる人たちが、「四十九日の頃に、遺族はぼっかり気持ちに穴があいたような気持ち」になることから、改めて定期的に行われる法事の意味に注目していることにも言及し、「喪の期間の節目を見直す必要があるのではないか」と提言された。

これに対し、秋田さんは「親しい関係性の人が亡くなるという危機を、葬儀によって紡ぎ直す」力があるのではないかと見る。とはいえ、かつての野辺送りのような地域社会全体で担う葬送儀礼の復活は極めて困難だ。実際に、高橋さんが調査している地域のなかにも、土葬から火葬に移った地域では「一度火葬をはじめると土葬はしんどい」という声があるそうだ。土葬のために「遺体をギュウギュウ押しして座棺に押しこみ、深い穴を掘って埋める」のは大変な作業である。それをやる意味が地域社会で共有されていなければ、わざわざ「めんどくさいこと」を続ける強制力もまたなくなってしまうのも当然である。

秋田さんもまた、「DVDを見て『野辺送りっていいなあ』と今は思っていますが、地域社会の儀礼を手放して快適で便利な都市社会を

目指したのは明らか」とコメント。故人個人がバラバラに暮らしている都市において、葬送儀礼による地域社会の復活は現実的には難しいという考えを示した。

## 僧侶が現場で感じている“葬式仏教”の問題点とは？

秋田さんによると、『変わるお葬式、消えるお墓(岩波書店)』の著者で、第一生命経済研究所主任研究員の小谷みどりさんは、あるシンポジウムの席上で「今のお葬式は葬式仏教にすらなっていない」と発言されたという。僧侶が葬儀の現場で感じている“葬式仏教”の問題点とはなんだろうか？

現在、多くの葬儀は葬儀社主導で行われており、「僧侶は読経をする」「遺族はお焼香をする」と与えられた役割をこなすだけである。安達さんは、そのような葬儀には、僧侶、遺族、参列者のそれぞれが「主体的に参加する」要素がないことを指摘。かつては、自宅や寺院での葬儀が営まれ、お寺は場所を提供することで遺族にコミットし、近所の人は参列者のお世話をすることもあった。葬儀会館への“お任せパッケージ”化が進むにつれて、「みんなで葬儀を作りあげていく」というあり方を崩壊させてしまった。

さらには、近年都市部では葬儀の簡素化が加速的に進んでいる。直葬や家族葬が選択される大きな理由のひとつにコストの問題がある。これまで見てきたように、葬儀の儀礼的な意味は地域社会の強い関係性に支えられてきたものだった。「儀礼を通じて死者を送る」というストーリーは、共同体内で共有されてはじめて機能する。個人がバラバラに暮らす都市においては共有されるストーリーもなく、儀礼の意味は空洞化し費用をかける理由もまた失われるのが必然だ。「なぜ葬儀にお金をかけなければいけないのか？」と、コストも時間もかからない直葬が選択肢として浮上するわけだ。

では、都市で暮らす人々が自分の好みでライフスタイルを選択するように、「自分好みの葬儀スタイルを選んでオーダーメイドする」という視点から、葬儀への参加度を上げていくという方向性はあるのだろうか？

安達さんは、葬儀において遺族側から「こういう音楽を流してほしい」というリクエスト



を受けたり、僧侶側から「こういう葬儀のパターンがある」と説明する機会が少ないため「檀信徒が選べる葬儀を提示するのはありかもしれない」と言う。それに対して、高橋さんは「遺族と僧侶の間で、葬儀のあり方についてキャッチボールがあればよいのでは」と賛意を示したが、秋田さんは「死に際してまで自分らしくと主張を通すのはまるで消費者感覚。それに僧侶が加担するのはどうか」と違和感を表明した。「自分らしく」は、伝統として蓄積されてきた儀礼の文化を解体させていくことになる。現場では、遺族の要望に応えながら葬儀をアレンジする必要もあるだろうけれど、僧侶はあくまで儀礼の伝統的なあり方に帰着させていく立場を保持するほうがよいというのが秋田さんのスタンスだ。

## “葬式仏教”再生への可能性をどこに見るか？

“弔いの共同体”なき今、葬式仏教を再生する可能性はどこにあるのだろうか？ 安達先生は「参加型葬儀」を、そして会場からはジャーナリストの北村敏康氏は「葬式仏教ではなく仏教の再生」への提言、仏教学者で浄土真宗僧侶の釈徹宗先生から「点としての葬儀ではなく長い関係性の結果としての葬儀」という視点がそれぞれ示された。

安達さんは、浄土宗の教学を研究する仏教学者であることから「自分の往生を目指せ」という法然上人の教えを説いていきたい原理主義者」だと自ら表明する。自分の葬儀は「念仏だけで送ってほしい」と言われるほどだが、葬儀の現場に立ち会うなかで儀礼的な作法の良さを感じることもあるそうだ。たとえば、遺族が死者の唇に水を含ませる末期の水。経験してみると「すごく良い」と感じたので、現在は葬儀に取り入れているという。また、葬儀の前には遺族に葬儀の意味を説明。経本を配って読経は和文で行うようにすると、最初は小さかった遺族の声がだんだん大きくなっていく。「お通夜が儀礼化しすぎている」という意見を聞けば、夜を徹してロウソクやお線香の火が絶えないように祭壇につき

そい、故人の霊がさびしくないように慰める“夜伽”の話をして、お通夜の意味を伝えることもする。一緒に折り鶴を折って、故人へのメッセージカードを作る“参加型の葬儀”も試みており「みんなで創りあげる葬儀は感動的。死の悲しみはぬぐえなくても『いいお葬式だった』という思いを持ってもらうことはできる」と話された。

質疑応答では、北村敏泰さんが被災地で数多くの葬儀に立ち会った経験から「東北にはもともと葬式無用論はなく、むしろ儀式に込められていた意味が活性化したのではないか」という視点を示された。同じ土地で暮らしてきて、数時間前まで一緒にいた人が津波で泥まみれになって死んでいるという「紙一重で生死が分かたれる」状況に直面して、死者を弔う葬儀の意味が強く意識されたのではないかと。東北では、生きているときの関係性があったからこそ「お葬式をして死を認めるために供養をしよう」と葬式仏教が再生された。もし、都市には共に生きる関係性の基盤がないのなら「葬式仏教ではなく、仏教を再生させたい」と思おうと提言。また、宮城県の心療内科医との会話から「医者は死を説明できない。死の意味を説明できるのは宗教家だけだ」という話を聞いたことを引用し、「僧侶にその役割を期待する」と付け加えた。

さらに、釈徹宗先生からは「友人の僧侶グループに、『葬儀が変われば生命観が変わる』という取り組みをしている人たちがいる」という興味深い例が紹介された。葬儀のあり方の分岐点は「ふだんからどれだけ葬儀について話し合っているか」にある。「弔電はいつ誰に打つのか」「お焼香の時間を別に設けて、参列者と一緒に読経をしたほうがいいのではないかと」と話し合いを重ねたうえで「同じ道を歩んだもの」という実感のなかで営む葬儀は「肌感覚で違ってくる」という。「点だけで関わる葬儀ではなく、長い関係性の結果としてある葬儀という感覚を持つ」ことの重要性を示された。

最後に秋田さんは、「お寺が死生観の拠点になれば日本社会は変わっていくんじゃないかと思う」とコメント。葬式仏教を起点としながら、「どう生きていくのか」というプロセスを示していくことに、寺院と仏教の可能性が触れることに触れて「應典院は手の込んだ葬式仏教をやっています」と締めくくられた。

社会貢献の場で格闘する若い僧侶たちを

見つめる秋田住職の視線はあたたかく、若い彼らをどのように支え育てていくのかを思いやる気持ちにあふれている。

日本の埋葬文化と切り離せない棺の形態は、鎌倉時代あたりから樽型の棺(座棺)が主流となった。現在も用いられる「棺桶(かんおけ)」という呼称はこの形状に由来する。座棺の埋葬は多くは土葬で、その風習は戦後も色濃く残り、いまなお一部の地域ではその伝統は継承されている。

遺体を座棺に納めるにあたっては、死者の身体を強く折り曲げ、膝を両手で抱えてその上に首を垂れるような姿勢をとらせなければならない。死後硬直した死者の身体は、容易には曲がらないから、首といい手足といい、骨はぼきぼきと折れてしまっただろう。それでも頓着しないのは、日本人はキリスト教徒のように遺体に執着しないからだろう。

火葬も可能であったがこの棺に対応する火葬場が少なく、薪木を燃料としていた場合は火力も弱かったため、実際に火葬が普及する戦後を待たなければならない。今日では土葬の減少もあって、主に寝棺が使われている。

ちなみに、土中に葬られた座棺は、数年も立つと腐食して崩れるので、その上の土が陥没して墓に穴が開くこともなる。それを防ぐために、あらかじめ墓穴より一回り大きい石を墓の上に置くこともあった。これが後になって、墓標や墓石に発展していくという説もある。



**杉本恭子／すぎもときょうこ**  
1972年大阪府生。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営・ウェブサイト編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに。現在『彼岸寺』ウェブサイトにて『坊主めぐり—現代名僧図鑑』と題したインタビューを連載中。  
<http://higan.net/blog/bouzu/>



写真は高橋さん自作による段ボール座棺。遺体を棺に入れて棒をわたし、男2人で棒を担いで墓所まで運ぶ。

# 私はチベットには 行ったことが ないけれど。

なぜ超宗派で  
チベットの平和を祈るのか



チベットの人々が信仰の自由を奪われ、その象徴であるダライ・ラマ法王は、ラサにはいらっしやらない。インドのダラムサラに亡命中です。そのようなチベットのおかれた状況を多くの人が知るところとなったのは2008年、北京オリンピックの年で、そんな状況が、チベットでは既に50年以上も続いていると言うことも周知のこととなりました。チベットという「国」はある、と思っていた人も多かったはずですが。

チベットに行ったことのない私は、10歳の頃からそれらのことを知っていました。テレビのドキュメント番組で法王の亡命を取り上げた番組を見たことがあります。その頃私の父は、教職を辞め、圓教寺に専従として戻っていて、同じようなメガネを掛け、丸刈りでやせた法王と父は風貌が重なっていたこともあって、その番組内容は強烈に心に刻まれることになったのです。「偉いお坊さんが、寺を、国を追われて逃げている」。それがチベット、ダライ・ラマ法王との出会いだったのです。

て、各国のメディアも取り上げる機会が少なくなってしまい、中国は世界中の人々が話題にすることが減り、平穏を装っています。しかしそうでないことは私たちだけでなく、多くの人たちが知っています。

2009年からチベットとその周辺地域で、50人を超える抗議の焼身自殺が続いていること、チベット高原を源とする大河メコンに巨大ダムを建設し、東南アジア諸国の環境を破壊しつつある事、尖閣諸島から南シナ海に至る海上での、未だに収まらない膨張主義の行使。それらに対する抗議行動は小さいものですが、明らかに広がっています。

組織的な運動や、メディアを大々的に利用したものではありませんが、一人でもやっている人は増えています。世の中を動かしていくのは、力強い一人の指導者による場合もあるでしょう。しかし、どんな大河でも始まりは小さな沢です。

がっていったのです。最初に習慣的に始めたのは1歳半の雌猿でした。

海を怖がらなくなった彼らは、夏には海水浴もします。子供の頃、私が川遊びでしていたように岩の上からダイビングするものまでいるそうです。きっとこれも若い猿が好奇心と勇気から始めたものです。年老いた猿の中には最後まで洗わなかったものもいました。この辺りは私たちの世界を見ているようです。偶然から生まれたのでしょうか、追いかみ漁の様なことも始めたようです。芋洗いは世代を超え、代々に継承されて今に至っています。群れ全体、閉ざされたこの島ですが、彼らは「世界」を変えてしまったのです。しかも動かしたのは、ボスではありません。幼い、若い、弱いもの達が社会を変えてしまったのです。私たちも気弱になってはいけません。年老いた猿のように、もっともらしい常識の鎧を身につけて、私たちは大事な勇気を失ってはいないでしょうか。私自身、このことを最も恐れます。

を行進する私たちに営業車の中から小さくピースサインを送ってくださる人がいるのです。

献血を思っ見ててください。数多くの善意で医療現場は支えられています。支えた人たちは医療に関わる人ばかりではありません。またどこかで行われている手術を思い生活しているわけでもありませんね。それでも「〇〇市で〇型の血液が不足です」と広報されれば、足を運ぶ方が列を作ります。2008年の日本、世界中を巻き込んだチベット支援の行動について、メディアも「熱しやすく冷めやすい日本人」などと揶揄することがありますが、決してそうではないことを私は知っています。

私たちは必ず続けよう。チベットの事を知り、一人でも多くの人に知らせよう。9月10日應典院に来ていただいた皆様到最后の御礼で申し上げたかったのはこのことです。目の前にいる人の数で私たちが見誤らないように、と言うことです。チベットの悲しみを伝え続けましょう。あなたがつねられても、私の身には痣はつきません。それでも共に泣けるのは、目の前であろうと、遠く離れていようと一重に想像力によるものです。幸も不幸も共に分かち合える様に自身を鍛えていきましょう。チベット問題に関わらず、世界中で起こっている多くのことは、自分の周辺に置き換えることができます。弱い、追い詰められた者こそが転換ヘスタートを切っているのです。あなたも私も共に走っています。このことは忘れないでほしいのです。

1

## 閉ざされた歴史

北京オリンピックの行われた2008年は、世界中が天安門以来の発展に俄然注視していた年でした。2008年がそれまでと大きく違っていたのは、インターネット、この通信手段の広がりによって、多くの人が自分の意思で発信できることが日常になってきたことでした。それによって世界中の各地でも、国内においても50年以上続くチベット問題が日常の話題となった。まさにこの年は赤い旗とチベットの年でした。三田の新興住宅地で近所の方を集めたり、自坊の新聞に取り上げ問題を提起して、チベットのDVD鑑賞会をした人々もたくさんいらっしやった。初めてデモに参加した人も多く、大阪の最初のデモの先頭を飾ったチベット国旗は、その時の代表者から私に託されています。

その後中国によるチベット入国制限とか、情報の制御によっ

2

## 危険を冒してでも…

宮崎県串間市の東部、200メートルほどの沖合にその島はあります。「芋を洗う猿」で有名になった島です。京都大学の霊長類研究所が戦後間もない頃から調査の対象としてきた島なのです。大抵の陸上生活を送る動物は、人間も含めて水が苦手です。温泉に入る猿もいますが、本来はあまり濡れたくないでしょう。研究所の担当者が定期的に船から砂浜に向かって餌をまきます。波の届かない安全なところは、ボス猿や強い雄達が先取りしていき、弱く、若いもの達は恐る恐る波の合間に芋を取りに行くしかありません。それでも危険を冒して水に入らないと得られないものもあります。そうしているうちに海水に洗われた芋には、塩味が付き、しかも濡れない安全なところでは、砂まみれだった芋が洗われて食べやすくなることに気づくのです。わざわざ持って行って洗う猿が始め、次第に安全圏にいた組織の上部にまで広

3

## それでも続ける意義

「宗派を超えてチベットの平和を祈念し行動する僧侶・在家の会」、通称「スーパーサンガ」。これが私たちの活動団体です。日常の活動は個人に寄るものですが、東京・関西・九州に支部、グループがあり、集う仲間は北海道にも広島、名古屋にもいます。もちろん大きなニュースになった長野善光寺もです。大阪での拠点は、應典院、天鷲寺、チャクラなどです。寺院とてこの活動に全てが門戸を開いているかという、そうではない現実もあります。しかし私たちはチベット人のメモリアルデーである3月10日には、世界中にいるチベット人と共に祈りと抗議の行動を起こします。そしてこの活動を支えてくださっているのは、一見普通に日常を送っていらっしやる多くの日本人です。雨の中

大樹 玄承(おおき・けんじょう)

書寫山圓教寺執事長。天台宗の別格本山である圓教寺は、西国三十三「西の比叡山」とよばれるほど寺格は高く、西国三十三所の観音霊場のうち最大規模の寺院。2008年6月に設立の「宗派を超えてチベットの平和を祈念し行動する僧侶・在家の会」(スーパーサンガ)では副代表を務める。僧侶148名、在家276名、法人55団体のネットワークとなっている。(数字は2010年度)

# WORKS

2012年1月から2012年8月までに起きたさまざまな動きを、レポートします。

## 法輪は



### 應典院本堂に、「極楽浄土」が浮遊する。 木村幸恵さんの現代アートをプロデュース。

應典院寺町倶楽部主催の「コムズフェスタ2012」の一環として、本堂ホールにて3月6日から15日まで、木村幸恵さんの個展「CRYSTAL CANOPY | 水晶天蓋」が開催されました。つり糸を素材に、これを精妙に編み上げた作品は、まさに極楽浄土をイメージさせる極上の世界となりました。

東京在住の木村さんは、大阪でものべ計1週間にわたって大蓮寺に滞在(レジデンスといいます)、もともと仏教思想に関心

があったというだけに、かなり哲学的な作品となりました。

3月6日のオープニングトークでは、木村さんとインディペンデントキュレーター・美術評論家の加藤義夫さん、秋田光彦住職の3名でクロストークを開催「浄土」「結界」「光」などをテーマに語り合いました。まさに宗教と芸術が交流する應典院ならではの場となりました。



## 3月6日

コムズフェスタ2011/2012「記憶を巡る旅」オープニングトーク



神戸で生まれた新しい防災訓練「イザ!カエルキャラバン」の開催中に行った東日本大震災物故者の供養(14時46分)

## 3月11日

### 3.11から1年。 鎮魂の祈りと、防災への誓い。

東日本大震災から1年を迎える3月11日、應典院、大蓮寺、またパドマ幼稚園全域を開放して、子ども、家族向けの体験型防災訓練プログラム「イザ!カエルキャラバン in 下寺町」を開催しました。日本はもちろん、タイやインドネシアでも開催されたこの企画は、親交のあるNPO プラス・アーツが担当、楽しみながら防災の知恵を学ぶ貴重な機会となりました。当日は、地域の家族連れ、子ども400人が参加、また大学生を中心に40人のボランティアも大活躍しました。

地震発生の直前には大蓮寺本堂前

で追悼の法要を行い、14時46分には梵鐘の音が鳴り響く中、参加者全員で黙とうを捧げました。その後も、焼香台に人の列は途切れなかったのですが、天気が一変して雨がパラパラと…。どこからともなく「涙雨やなあ。」という人々のつぶやきが胸に残りました。

### 宗教教育について真正面から語りあう。 いま幼稚園、小学校で起きていること。

6月20日、教育シンポジウム「幼少期の<宗教心>をどう育てるか〜私立幼稚園・小学校における宗教教育の今」をパドマ幼稚園主催で開催、会場となった應典院には、幼小期の宗教教育にかかわる3人の先生方を招きました。

いずれも近畿圏で知られた名門校である四天王寺学園常務理事の塚原昭應先生、元関西学院の初代初等部部长(小学校校長)の磯貝曉成先生、そしてパドマ幼稚園の秋田光彦園長が壇上に並びました。「なぜ幼少期に宗教教育なのか」「他者、他力とは何か」「道徳教育と宗教

教育」「これからの宗教教育の可能性・必要性」など議論は深掘りされましたが、宗教の違いを超えながら、通底する祈りの力の普遍性に気づかされました。

パドマ幼稚園の保護者を中心に80名の参加者のうち、多くは母親でしたが、いのちの教育論に聞き入る真剣かつ熱心な様子が印象に刻まれました。



應典院寺子屋トーク第63回「仏教をつかいたおす極意、教えます」(左が釈先生、右が小池さん)

## 6月21日

### 看取りから地域を支える。 生き方と逝き方を考えるエンディングセミナー。

毎夏、恒例のエンディングセミナー(大蓮寺・應典院共催)、今年は「看取りから地域を支える」というテーマで、これにかかわる市民活動者と僧侶をゲストに3回連続シリーズとして開催しました。

7月8日には、NPO法人ささえあい医療人権センターCOMLの山口育子理事長、同14日にはNPO法人つどい場さくらちゃん丸尾多重子さん、21日には真宗大谷派の僧侶中下大樹さんをそれぞれ招

きました。参加者の関心は大きく、のべ127名でにぎわいました。

とくに、お寺に身を置かず、「単独僧」として2000人以上の見送りに関わってきた中下さんのお話は深く、説得力のあるものでした。自己肯定感の低さが指摘される時代だから、他者に関心を向ける主体性が自らの逝き方を左右すると示されました。

長年、医療相談事業に取り組んできた

### 仏教をつかいたおす極意とは? 小池龍之介さん、應典院、初登場!

いま、数々の書籍やメディア出演で若い世代に注目の僧侶、小池龍之介さんが、應典院に初登場、6月21日、第63回寺子屋トーク「仏教をつかいたおす極意、教えます」にて、おなじみと釈徹宗さんと初対談と相成りました。じつは、小池さんは浄土真宗本願寺派から破門処分を受けた後だったのですが、つまりそれほど仏教を多様に「つかいたおす」魅力を存分に語っていただきました。小池さんの地域の方々と農業をする暮らし、幼少の頃に抱いた葛藤、タイのブッタダーサ師と瞑想との出会い、パリ語の経典と仏典における「繰り返し」の意味、そして近代以降に固められてきた自我と日本仏教について、ゆるやかに話題を展開されていました。

対話のラストはニーチェなどの西洋哲学まで言及されたのですが、現代仏教のかるやかな知性にふれようとする、多くの参加者で、應典院本堂は満杯となりました。

## 7月8日



エンディングセミナー2012「看取りから地域を考える」の開催に先立ち、執り行われた第2回大蓮寺「自然賞」の贈呈式。

COMLには、2回目となる自然賞を贈呈、生前個人墓自然の基金から奨励金を差上げました。これもNPOとお寺の協働事業のひとつと心得ています。

個が知恵を絞る世界から、  
関係性がデザインするコミュニティへの回帰へ…。  
東日本大震災は「祈り」による関係構築への帰巣をもたらした。

■合理を超えた関係づくりを

2012年9月15日、應典院寺町倶楽部の第63回寺子屋トークに、哲学者の内山節さんをお招きしました。哲学者と聞けば西洋の思想の研究者と想像する方も多いのではないのでしょうか。しかし、内山さんは1970年代から東京と群馬県上野村を往復して暮らし、言わば現代を生き抜く思想を、自らの生き方と他者との関係性の中から紡ぎだそうとしておられます。現在は、立教大学大学院21世紀デザイン研究科教授というお立場もありますが、長らく書籍と実践の相互の研鑽から、思索を巡らしてこられた方です。

内山さんの演題は「祈り」から3:11後社会をデザインするでした。このテーマとなったのは、2012年2月に出版された「ローカリズム原論」の内容に深い感銘を得たことが影響しています。内山さんは講演の冒頭で、阪神・淡路大震災は関西の災害と見る人が多かったかもしれないが、東日本大震災は日本

全体で考えなければならぬ問いをもたらした、と切り出しました。それは、自然と原子力発電所の関係に折り合いがつかぬのかという問題であると示されたのです。

近代以降の日本は、欧米的な価値観に基づき「社会は人間が構成する」という考えが根差されてきた、と内山さんは分析します。そして「伝統的に日本では死者と自然とのあいだで絶えざる祈りや願いが習俗として継承されてきたところも明らかになつた。自然と人間と死者との相互関係の中で暮らしたが、當り前のことに、私たちの関心を向けました。そして、原子力災害がもたらされた東日本大震災は、日本に暮らす人々に精神の古層に働きかける、帰巢的な思考を促したのではないかと訴えます。しかし「人間にのみ理性や知性がある」といつた傲慢な考えと、人間がもたらした原子力という技術が、自然と人間との関係においてこの先どうなるか不明の要素を残したことが明らかとなつた今、合理では捉えられない「祈り」などによる関係づくり

を見つめ直すことが重要になると仰います。

■「みずから」より「おのずから」

当日は内山節さんの講演に続いて「祈りは「コミュニティを創造するか」と題した、パネルディスカッションが行われました。まず、應典院による東日本大震災やチベット騒乱に対する追善法要の取り組みの紹介とあわせて「祈りの中には、言いようのない苦が根底にある」という秋田住職からの問題提起を受け、大阪市立大学の白波瀬達也さんが「重要なものは有事よりも平時に祈りがあるかではないかと、さらに問いを深めました。こうした議論のコーディネーターは奈良・金峯山寺の田中利典執行長で、「シャワーを浴びるのと滝にあたる」ことが異なるのは、無条件に何かができるかどうかなど、山伏であるご自身の経験も踏まえて、掲題の内容へと参加者の興味を駆り立てていかれました。議論の途中には、宗

教社会学がご専門である大阪大学の稲場圭

信准教授がコメントレーターとして「共苦に基づく共感縁の存在について整理されました。内山さんは著書「ローカリズム原論」でも「祈り」とは「みずから」することではなく「おのずから」すること詳しく述べています。その例に家族の幸せを祈る気持ちがあるから家族が成立する(49頁)ことを挙げています。転じて東日本大震災は、突然にして物質的、肉体的、精神的、文明的に多くのものを喪失することになりました。ゆえに「おのずから」の「祈り」が生まれたと内山さんは仰います。

「おのずから」の「祈り」は、経済や効率や合理といった誰かによつて集約され説明が付けられる関係ではありません。そこには生者を中心としない、風土や文化への思いが重ねられています。前掲書には「復興のグランドデザインは文学的に書かれなければならない(164頁)と書かれています。誰かを代理人として委ねるのではない、おのずからのささやかな行為を通じて関係性の構築が、よりよい未来を拓いていくでしょう。」

(山口洋典)

▼10月の好日、息子を同伴して、浄土宗教師養成道場の入行試験に赴いた。これは浄土宗の僧侶資格取得のための特訓道場で、今日は受講前の予備試験のようなものだ。師僧同行が義務付けられていた。

▼そもそも現代の僧侶養成のためのカリキュラムについて、是非を問う声は昔からある。「寺を家業化している」などと批判も多いが、日本仏教の最大の特徴はよくも悪くも、この世襲制にある。入行予定者の大半は寺の息子、娘たちだが、今の段階でどれほど僧侶となる意欲があるかは測れない。親に言われて仕方なく、という動機であっても笑えない。

▼子どもから若者へ、大人へ、と成長していく上で、通過儀礼は欠かせない。成人式や結婚式、葬儀式など多くの人生儀礼がそうであるように、通過儀礼とは、次なる人生の段階の期間に新しい意味を付与してくれるのだが、現代人の人生はシームレス化している。若者から大人へ、大人から老人へと切り替わる明確な転換点が見当たらない。いつまでも学生のまま、いつまでも現役のまま、いつまでも子どものまま……次への成長のためにこれまでを捨てるという覚悟が、私たちはできていないのだ。

▼僧侶養成道場とは、残された数少ない通過儀礼である。僧侶資格は結果であって、目的ではない。彼らは、これから僧侶という人格を目指すのだ。ふだん携帯とネットとファストフードに親しんだ若者たちに、そんなことが仕込めるのか、と心配されそうだが、私は楽観している。通過儀礼の儀礼とは宗教体系であり、日本仏教には高度に洗練された「型」の数々があるからだ。すぐれた型は、新しい身体を運用させていく。内田樹的に言えば、「型とは、発信力の非常に強い身体運用が伝えられて残ったもの」だからだ。

▼入行予定者の諸君を前に、道場係の指導員が「お経はもっと声を出して!」と発破をかけた。ささやくような小声は若者共通だ。声を出すには、腹帯をしっかり締め、姿勢を正し、呼吸を整えなくてはならない。そして、その声の宛先は誰なのか。

(彦)

サリュ・スピリチュアルvol.6  
2012年11月30日発行

編集長:秋田 光彦  
編集:山口 洋典・池野 亮光  
写真:山口 洋典

発行:大蓮寺・應典院  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
(〒543-0076)  
電話06-6771-7641  
FAX 06-6770-3147  
Email info@outenin.com  
URL http://www.outenin.com

